

『沖繩戦とろう者』

ちぢいわ けいこ
千々岩 恵子 (D-PROろう歴史学チーム)

平成8年3月末にたまたま沖繩戦の映画「GAMA-月桃の花-」(字幕付き)を観たきっかけで沖繩ろう歴史を調べ始めた。このレポートは、平成9年3月末から平成10年4月までに収集した資料や現地でも得た証言などに基づいて作成したものです。

【沖繩戦とは! ?】

太平洋戦争の末期に沖繩本島と周辺本島で展開された日米最後の地上戦闘。54万8千の米攻略部隊は、1945(昭和20)年3月26日に慶良間諸島に上陸、4月1日には沖繩本島に上陸した。

11万5千~12万の沖繩守備軍(第32軍)は6月下旬に壊滅、6月23日牛島満司令官らが自決して組織的な戦闘は終わった。しかし局地的な戦闘はなお続き、南九州からの特攻機出撃も8月まで強行された。かの有名なひめゆりの悲劇、戦艦「大和」の最期もそこにあった。

南西諸島の日本軍が米軍に無条件降伏したのは9月7日であった。この間、守備軍は在郷軍人を徹底的に召集し、さらに兵力不足を補うために沖繩住民を根こそぎ動員を行なった。中学校や女学校の生徒も学徒隊として戦場に動員した。(日本政府が8月14日ポツダム宣言を受け入れ、敗戦処理にかかっていたが沖繩ではまだ戦闘が続いていた。)

沖繩戦における死者は米軍が約1万2520人、日本軍が約9万3千人、住民の死者は約9万4千人。しかし、味方の日本軍から壕を追い出された者、スパイ容疑による虐殺者、自決を強要された者、傷病死などを総合すると住民の死者は15万人以上と言われている。

【10・10空襲】

沖繩地上戦の約半年前の1944(昭和19)年10月10日、沖繩は初めて米軍の空襲を受けた。同日午前6時40分頃から午後4時過ぎまで米第58機動部隊の艦載機のべ1356機による無差別攻撃を受けた。大機動隊による空襲だったが、沖繩守備軍はこの動きを探知していなかったため損害が大きく、死傷者は軍民合わせて1500人にのぼった。奄美諸島から沖繩・宮古・八重山まで、南西諸島の飛行場と港湾、特に那覇市の90%を焼き尽くした。この「10・10空襲」で沖繩住民が本土への疎開が急増した。

【戦前の沖繩ろう学校の様子】

戦前の「沖繩県立盲聾学校」は那覇市真和志村字古波蔵にあった。

ろう部の教職員は校長先生を含めて4名で、そのうち1人はろう者。彼は我謝盛輝(沖繩聾学校出身)といい、東京聾学校師範科を修了して来た。他に、助手として現在、沖繩県ろう協会老人部長を務めている大湾雅雄氏も教えていた。生徒の人数は約30人であった。

沖繩は本土より遠く離れていたうえ、明治12年(1879年)3月25日薩摩藩の島津氏による攻略まで400年余りの長い間琉球王国時代で独自の琉球文化を持ち、琉球語を話す民族であった。琉球王国から沖繩県になってから約半世紀しかたっておらず、その為に日本のような大和魂が欠けていると指摘された。その事から沖繩県政府は本土より皇民化教育を徹底された。琉球語を禁止し、天皇の写真を崇拜する様、強制された。沖繩のろう学校も毎朝、天皇を崇拜する行動を強制されたが、標準語で話すように訓練する場面は聴者よりさほど問題はなかったと思われる。

昭和19年(1944年)10月、戦時下により初等部児童は各家庭に引き取られ、中等部生だけが学校に残っていたが、家族等で本土へ疎開する者や各家庭の判断で中等部生でも途中で学校を辞めた人がいた。

ろう学校での戦争準備は、体育の授業時に竹槍りの訓練や校庭に防空壕掘りの作業等があった。ろう学校の中等部以上で体力のある生徒は軍事産業に勤労奉仕された。飛行場建設や壕掘りなどに従事した。当然手話通訳者の配置や特別な配慮もなかった為、コミュニケーションがうまくいかず、損する事もあり、ひどい時はスパイではないかと疑われた事もあった。ろう学校校舎もほとんど海軍人事部や大政翼賛会の兵舎として強制に使われ、校庭はイモ畑に変えられた。その為、残った中等部生徒は教室はもとより、寝る場所も事欠く有り様だった。

【戦時中の沖繩ろう学校の様子】

10・10空襲で那覇市をほとんど焼き尽くしたが、中等部生は校庭の片隅に自分たちで掘った防空壕で難を逃れた。校舎も奇跡的に被害を免れ、そのあと3ヶ月も過ごした。しかし、昭和20年(1945年)1月には、ついに中等部生にも疎開命令が出たので、2月11日に卒業式を繰り上げて行い、閉校解散となった。4日後、校長高橋福次先生が船にて単身で宮崎へ渡り、疎開地を準備し生徒職員を来るのを待ったが既に遅く、児童生徒達は家庭と共に戦場をさ迷った。

沖繩戦では4人に1人の割合で亡くなったと言われているが戦前、身体障害手帳などの制度がなかったのでろう者の死亡数はいまだにも分からない。戦前、沖繩盲ろう学校に在籍した児童生徒の中で亡くなったのは5名であった。ろうの教員我謝盛輝先生も沖繩地上戦の犠牲となった。

＜ 年 表 ＞

大正13年2月	那覇市若狭町に私立沖縄聾啞学校創設。
昭和18年4月	県移管により、沖縄県立盲啞学校と改称。
昭和19年10月	戦時下により沖縄県立盲啞学校初等部児童は各家庭に引き取られる。中等部生だけ学校に残る。
昭和19年10月10日	10・10空襲。那覇市をほぼ全焼する。
昭和20年2月11日	沖縄県立盲啞学校、戦災のため閉校。
昭和20年2月15日	沖縄県立盲啞学校校長、高橋福次先生が宮崎へ単身で渡り、疎開地を準備する。
昭和20年3月5日	学徒や一般老幼婦女子の県外疎開が打ち切られる。
昭和20年3月6日	県、満15歳～45歳の男女を全員現地召集。
昭和20年3月25日	米軍、沖縄本島、慶良間諸島に艦砲射撃をはじめめる。 混乱の中、住民は北部への疎開が相づく。
昭和20年3月26日	米軍、慶良間諸島(阿嘉島、慶留間島、座間味島)に上陸。座間味島で172人、慶留間島で53人の住民が集団自決。 ニミッツ元帥(米太平洋艦隊司令長官兼南西諸島軍政長官)が「海軍軍政府布告第1号」を公布する。 慶良間諸島における日本政府の全ての行政権を停止。
昭和20年3月27日	米軍、渡嘉敷島に上陸。渡嘉敷島の住民が350人集団自決が起こる。
昭和20年3月29日	沖縄本島への艦砲射撃が激しくなる。
昭和20年4月1日	米軍、沖縄本島中部の北谷・読谷海岸に上陸。直ちに北・中両飛行場を占拠。 ニミッツ元帥が「海軍軍政府布告第1号」を再公布し、沖縄における日本政府の全ての行政権を停止。
昭和20年6月10日	米第10軍司令官バックナー中将、第32軍司令部に降伏勧誘状を送る。
昭和20年6月12日	米軍、降伏勧告ビラを空中から大量にまく。
昭和20年6月17日	牛島司令官、バックナー中将の降伏勧告を拒否する。
昭和20年6月21日	米軍、日本軍最後の拠点81高地(真壁)と89高地(真文仁)を占領。米軍、沖縄確保を発表。
昭和20年6月21日	陸軍大臣、参謀総長は牛島司令官に「貴軍の忠誠により本土決戦の準備は完了」との訣別電報を送る。
昭和20年6月22日	米第10軍司令部、アйсバーク作戦終結を公式に宣言。
昭和20年6月23日	牛島司令官、長男参謀長、自決する。米軍、掃討戦を実施。
昭和20年6月25日	大本営、沖縄における日本軍の組織的作戦が終わったと公表する。
昭和20年6月30日	米軍の本島南部の掃討戦終了。
昭和20年8月4日	米軍の本島北部の掃討戦終了。
昭和20年8月6日	広島に原子爆弾を投下。
昭和20年8月9日	長崎に原子爆弾を投下。 御前会議、「国体護持」を条件にポツダム宣言の受託を決める。政府、スウェーデンとスイスを通じ連合国へ申し入れ。
昭和20年8月14日	御前会議、無条件降伏状を決定する。
昭和20年8月15日	昭和天皇、戦争終結の詔書をラジオで放送。 沖縄県石川市に戦後最初の沖縄の行政「仮沖縄人会」が創立する。
昭和20年9月2日	日本政府、米艦ミズリー号上で降伏文書に調印。
昭和20年9月7日	南西諸島の全日本軍代表(納見敏郎先島群島司令官、加藤唯男奄美群島司令官、高田利貞陸軍少将) 嘉手納の米第10軍司令部で無条件降伏文書に調印。沖縄戦は公式に終結。
昭和22年3月	本土で「教育基本法」「学校教育法」が公布する。小学校6年、中学校3年の義務制が実施する。
昭和23年4月1日	本土の盲学校及び聾学校の小学校1年生から学年進行による義務制を実施する。
昭和23年～26年	沖縄本島及び各群島政府が本土の「教育基本法」「学校教育法」が公布する。(盲学校及び聾学校についてはなし)
昭和26年4月1日	琉球政府立沖縄盲聾学園設立認可。
昭和26年8月1日	那覇市首里石嶺町4丁目に盲児16名、聾児16名、計32名で開校。
昭和29年7月1日	琉球政府立沖縄盲聾学校と改称。
昭和47年5月15日	沖縄、日本へ復帰する。 盲学校及び聾学校の完全義務制を実施する。

《 引用・参考文献 》

「沖縄の特殊教育史」	沖縄県教育委員会	「総史 沖縄戦」	大田 昌秀／岩波書店
「沖縄県高教組二十五周年運動史」	沖縄県高教組合	「沖縄戦のはなし」	安仁屋政昭／沖縄文化社
「平成9学年度 学校要覧」	沖縄県立沖縄ろう学校	「写真集 沖縄戦」	大田 昌秀／那覇出版社
「新版 日本史辞典」	角川書店		